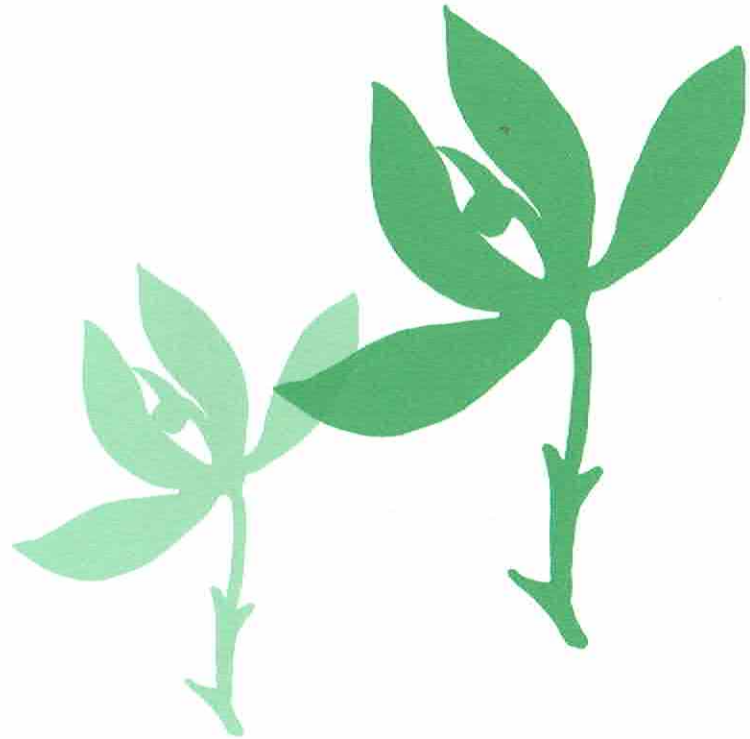
二〇一八年（平成三十年）九月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第九十五巻第九号

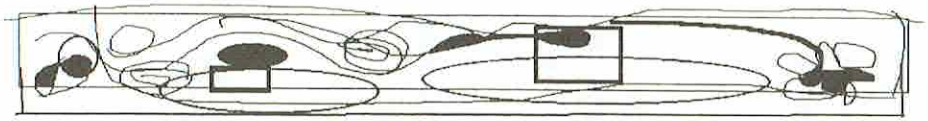
村野次郎創刊

香蘭



2018年（平成30年）9月号

第 95 巻　　第 9 号　　通巻 1053 号



香蘭

2018年（平成30年）9月号
第95巻　第9号　通巻1053号

目次

村野次郎作品　私の愛誦歌（37）……森田　徹　表二
今月の特選……石井・加納・鈴木（桂）・朝香・伊藤（康）・渡辺（礼）・大井田・今井・市川……2
作品
一……4
二……20
三……29
推薦香蘭集……38
香蘭集……39
村野次郎への旅（102）……千々和　久幸……18
歌の生まれる場所（69）……宮口　弘美……28
エッセイ・自由研究　能における和歌の役割……山下　紘正……44
焦点（七月号）テレビに取材のもの……西沢　みつぎ……46
作品一特選欄評（七月号）……千々和　久幸……48
作品評（七月号）作品一……水本　美恵子……50
作品二……岩田　明美……52
作品三……石田　フクエ……54
香蘭集……松沢　みどり……56
緑地帯……柏原（恵）・大貫・古野……58
七首抄（七月号）……清水（す）・阿久津・後藤・中村（陽）……60
明宝研究会第九十六回六月例会……児玉　敏昭……61
他誌拝見　93……武藤　昭彦……68
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動き……69
創刊九十五周年記念　平成三十年度香蘭短歌会全国大会記……73
歌会及び会合・会員消息・後記・新宿日記、他……85
創刊九十五周年記念　平成三十年度香蘭短歌会　全国大会集合写真……90・表三
表紙絵……香蘭短歌会のマーク「蘭の花」　目次カット……和田　和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（37）

年老いて身にほしきものあらねどもただ一つほしわれの佳き歌

『角笛』

森田　徹

私がこの歌を選んだのは、千々和代表の著書『酔風船』を読んだからである。この中には「次郎、時に八十二歳」と書かれている。今年私は七回目の年男である。まさに村野次郎先生がこの歌を詠まれた年齢である。

代表はこの著作の中で、「ナルホド人間八十歳を越えるとかくも無欲透明になるものかと崇敬はしたが…」と続けられている。

村野先生がご存命の時代と今では、平均寿命は比較にならないくらいに伸びたが、それでも男性にとって八十歳のひと山を越えることは大変なことだと、私は経験から分かっている。私の場合「無欲透明」とまではいかないが、八十路を迎えてからは気力、体力の衰えは如何ともし難いのが現実である。

私如きが村野先生の歌を批評しようなどとは決して思わないが、ただ八十路の男として心情的に強い共感をこの歌に感じるのである。

（『角笛』226頁、『村野次郎三百首』119頁に所収）

四選者の作品

平成が終る　　平塚　千々和　久幸

隣り合う外科より動物病院の賑わい平成の秋の闌けゆく
われもまた永久（とわ）に群衆の一人にて平成終る雑踏を行く
輪郭の淡き遠景に同じ表情して大勢の人の歩める
わっと咲きわっと散りゆく心地してわれの平成終りに近し
平成は未だ昭和の残像のまま手触りのなく世紀果つ
朧げに浮く半月を酔漢が良いよいいよと宥めて帰る
三日間断酒ののちに飲む酒に立ち眩みせしがほどなく醒めつ
過去という鈍色の海に沈みゆくしばらくは心宙づりのまま

われのみの味　　さいたま　西沢　みつぎ

うしろかげニュースに見せし父と子の登山は死出の山となりたる
好きなことには意外な元気出る矛盾みづからにさへ理解させ得ず
なつかしさなるひと味が加はりてわれのみの味ふるさとの味
人間の一興に服を着せられて一言なきや飼犬たちよ
終活も断捨離もせずなるやうになれとばかりに卒寿を過ぎぬ
責任は返上をして今しばし衰へし身を詠みてもみんか
怖れぬし退屈といふ時間帯　老い果てたればそれさへ寄らず
国ぢゆうが包まれてゐる熱狂の外にサッカーオンチのわたし

口癖　　鎌倉　香山　静子

ゆふべともなれば駅前の欅にも一宿一飯の小鳥ら憩ふ
太つちょの雀がわれに呼びかける「生きてゐますか。もう朝ですよ」
汚れたる鳩がしたした前をゆく見知らぬ界へと案内（あない）するごと
この世にて会へざる人の増えゆけり北なる故郷のほらあの人も
大岡信も中野孝次も逝きたれば何かさみしい私の書架は
「歌びとはちょつぴり悪（わる）の方がいい」時折おもふかの口癖を
悔ゆべきはあまたあれども重ねたる齢に免じてお許し下され
「あゝ、あの人ね」あの人で会話は進む午後の茶房に

小さなあたま　　我孫子　丸山　三枝子

六月の第四土曜は我孫子ですママはお仕事パパはマラソン
箸セット着替えとおもちゃ背に負いて預けられっ子太一参上
軽皇子（かるのみこ）ならねどわれの皇子なり竹林に立つ太一を写す
あおぞらに赤花ひらき仰がするアメリカデイゴやっぱりくどい
境内のみどりを縫いて漕ぎわたる舟なり夫と幼児とわれと
六歳と行く弁財天「静かだね」「いるのは神さまとボクたちだけ」
弾みゆく幼児の脚　病む足を運びゆく夫　紫陽花のあお
ありがとうございましたと言わされて帰りゆきたり小さなあたま

今月の特選

チバニアン　習志野　石井雅子

地球磁場の逆転の痕跡があり千葉時代と呼ぶ　恐竜ぢやない

新聞を束ねてもらひしペーパーは軽くてすぐに使い切りたり

一枝の白きうつぎが開いてゐるここだけよと言ふ打ち明け話

十台の車従へ茶のロバが千葉の国道歩いてゐたり

夕暮は雀色時すずめ色の風が吹くなり黒森山より

沈黙の臓器と言はれ耐へてゐた大変だつたね夫の肝臓

建て替への一年間は会員みなフィットネス難民となりて彷徨ふ

夏椿　多治見　加納喜美

理由なき殺意に昏む二ュース増す誰でも良かつたなどと言わせて

いつ何が起きても不思議の無い地球今日のいのちの夏椿散る

観光客増えて戸惑う城下町露地の奥まで〈半分。青い〉

藤村の馬籠は細い坂の道五平餅など歩いて食べて

この酒は荷風好みと宣伝文　荷風は何だと聴く著者ら

体調の良い日だけ行く畑には坊ちゃん南瓜が見るみる太る

トマトには違いないけど違和感をもって摘んでる黄色のトマト

「吾十有五にして」　西宮　鈴木桂子

夫逝きて五年十年十五年而して立つわが少年も

マザコンになりたくないと子は言ふがもう十分にマザコンである

わが老後婚せぬ息子のパンツなど洗ひて終りか　今日も暮れゆく

口の中に斧あるごとく追ひつめて子を傷つけて気づかずにゐき

機嫌よきころに電話の切れたれば娘の一日無事にすみしか

国とほくここに来たりて日々ながむ六甲の山六甲の空

きみを詠む子をわれを詠む忘れ物して来しやうな後悔あれば

睡蓮ひらく　東京　朝香ふさ枝

ぎこちなく額衝く孫に命日の写真の夫がほほえみており

夕庭に一葉ちぎりし月桂樹の香は懐かしき人を顕たしむ

鶯の声に聞き入る朝々の近くの寺に睡蓮ひらく

雨そぼつ路地にましろき紫陽花の盛る六月別れの多き

町に二つ信号機ありてその一つともしびのごとわが部屋に見ゆ

あかときの胸苦しさに目覚めたり命つくづく身に沁みきたる

風邪薬にうつらうつらの日を過ごしシンガポールの会談終わる

顔　東京　伊藤康子

吹きつけるだけじゃ足らぬか南風若きカリンを次々落とす

特売の苗の勢いて七本目の胡瓜実らせ母喜ばす

サッカーの俄ファンも中継を見て視聴率押し上げており

スタンドのゴミ拾いするニッポンのサポーター等がニュースになりぬ

顔認証導入するらし　目の位置を印に合わせ三枚写す

こんな顔していたんだと思う間に無修整のまま登録となる

この顔でログインできずにセキュリティロックされたらもう働けぬ

時に鋭く　横浜　渡辺礼比子

わがスマホ不調にてメール受信せず半日遅れに知る母の怪我

とり囲むわれらを見つつ病床の母は問いにき　私は死ぬのか

まっすぐで綺麗と医師は評価せり画像に走る大腿骨の皺

足とわが内緒話を聞き咎む老耄の母の時に鋭く

旅行誌の富士夕景をよろこべり富士山仰ぎ育ちたる母

一病をもて息災の六姉妹一病すなわち認知症にて

わが友と慰めあえり　年寄りの「もう死にたい」は殺し文句ね

テレビの声　川崎　大井田啓子

五十年経たる母校のグランドにブランコを漕ぐ　雲を仰いで

新築の売家つらつら眺めゐる男のブルゾン風にふくらむ

冷房の吹き出し口を閉ぢる人開ける人あり走るバスにて

降るとなく降る春のあめ木蓮と辛夷のちがひテレビが見する

マフラーをせよ傘を持て迷はずにテレビの声に従はんとす

熱中症に水を飲めとて国中の民草が持つペットボトルを

プリンターのインク切れたり知らぬまに春はずんずん進むやうなり

わが原風景　大分　今井紀一

遠浅の海に戯れいる子等をわが原風景とあかず眺むる

手応えはわれの腕にも伝播なす突堤の人の竿の撓みは

葉の陰に紛れがちなる柿の花かぞえて秋への日日を楽しむ

いくばくか寿命の伸びる思いなり六時の庭にのこる西陽に

石塀のはざまに今年も小さき花去年よりその名は知らぬままなり

頷きしわれに視線を合わすまま講師は暫く語りつづける

強引に安保法制成してより現内閣は綻びを見す

路面電車　東京　市川義和

青春の思ひ出として残りをり池袋発の都電十七

終点は銀座数寄屋橋　その途中に古本街の神保町あり

在京の学生時代十年にいくたび乗りしか同じ路線を

十七の数字に強き思ひあるは系統十七の都電が原点

長年の都電体験沁み込みて路面電車のファンとなりぬ

わが好きな街は函館長崎なりどちらも路面に電車が走る

葉桜の飛鳥山公園右に見てわが乗る都電大きく曲がる

村野次郎への旅（102）

わが青春の村野次郎（一〇二）

千々和　久幸

東京における高校の同期会が、もう四十年以上続いている。昨日はその席で、「おい、お互いにそろそろ自分の人生に落とし前をつける頃だぜ」、などと喋ってきた。

今月の先生の⑦、⑧の歌を読むと、そぞろに「落とし前」の行方が気になる。

さて1965（昭40）年7月号の先生の巻頭歌は、「遠くゐる声」八首であった。今月の一連は、構えとしては例月のように時事を含んだ身辺詠のかたちをとってはいるが、題材はそれぞれ一首完結という趣で、いつものドラマ的な構成にはなっていない。

①窓越しに聞こえ明るき笑ひ声ひと日こころに来て動揺す
（窓越しに折々あがる笑ひ声ひと日聞きつつこころ動揺す）

②装ひのま白き衣をかつぎつつ恥らひ清し嫁ぐ日の魔女
（装ひのま白き衣をかつぎつつ恥らひ嫁ぐスポーツの魔女）

③白鷺の雛をはぐくみ精薄児養りゐし顔かがやき交す
（白鷺の雛に集まり精薄の児らはぐくむと顔かがやかす）

④押入れの服の汚れに黴育つ感じに暗く今日も蒸す雨季

⑤ベトナム戦批判する声はげしけれど所詮は生死に遠くゐる声

⑥夏来るビル一角の店先に風草の鉢みどりそよがす

⑦生ありてめざむる明日を疑はず闇のまぶたを安らきて閉づ

⑧「追憶の一こま」読めば人生のたそがれを行く緒方実見ゆ

①の歌、穏やかな歌い出しでありながら、結句にきて突如転調する。それは結句の「動揺」の読み方にある。「動揺」の第一義は、広辞苑によれば「動きゆらぐこと。ぐらつくこと」だが、普通わたしたちは第二義の「気持などが不安定になること。不安」の方へ感情を傾斜させて読む。

そうなると、穏やかで平和な、恐らくは一過性の「明るき笑ひ声」に、なぜ作者が「動揺」しなければならなかったのか、その理由が知りたくなる。あるいはその声が内実を知る作者には想定外のものであったからか。

いずれにしろ、読者の立場では不完全燃焼に終わった一首であった。

②の歌、いつもの先生お得意の（？）時事詠である。「魔女」は言うまでもなく（と言っても若い世代には馴染みが薄いかもしれないが）バレーボールの世界における「東洋の魔女」、その魔女の象徴が1962年の世界選手権、1964年の東京五輪コーチ兼主将として日本のバレーを優勝に導いた河西（中村）昌枝、本日の花嫁である。

彼女が当時の総理大臣佐藤栄作の取り計らいで結婚したのは、1965年5月30日。先生はいち早くそれを一首にされたもの。

ただし短歌作品としては、いささか古風で

ステロタイプ（紋切り型で常套的）な表現になっている。歌集では「清し」が削られ、魔女の上に「スポーツの」が乗って少し涼しくはなったが、ここはお祝い（儀式）の歌と読んでおけばよかろう。

③の歌、一連に前後との脈絡なく、こんな歌が紛れ込んでいるのは珍しいが、これも先生の生活詠だと読めば、不思議はなかろう。

作品の背景は詳らかにしないが、精神薄弱児の施設を見学（慰問）された折のものでもあろうか。そう読めば納得がいくが、そうではないのかも知れない。

④の歌、まさしく身辺雑詠、生活詠の典型的な歌。今年もそんな梅雨どきにこの稿を書き継いでいるが、作品通りの気分である。

事実に即して詠んだところにリアリティを感ずるが、下句はいささか安易に詠い流されたのではあるまいか。

⑤の歌、これも先生流の時事詠である。先生流というのは、ベトナム戦争を詠ってもその本質や真実の追求に及ぶことはなく、あくまで戦争を一風俗、一社会現象として外側から捉える視点を指す。

だからわたしには、上句より下句が強く印象に残っている。なぜならこの下句は、どんな上句を乗せてもちゃんと納まりそうな魅力があるからである。一フレーズとして完結しているからだ。

むろんこの作品は、当時の世相の一断面の切り取りに先生の達観した視点が見え、上、下句の組合わせでこそ味わい深い作品であることは言うまでもない。

⑥の歌、初夏へのご挨拶の歌、というべきか。何でもない光景をそのまま詠んだという感じの歌。読者からすればあとひと味欲しいが、これを格別の歌にしようとすれば、生硬になるか綻びが出るかだろう。ニュートラルな歌としてこのまま読んで通り過ぎよう。

⑦の歌、ある年齢以上の読者には、「分かる、わかる」という歌。何事もなく一夜が明けると、「ああ、今日も生きていたか」と生あることを実感する。

作品としては上句にやや冗長な感じが残るが、それは真っ当に詠い過ぎたからで、この文脈ではこうなる、という歌。

⑧の歌、初句の「追憶の一こま」、それに呼応する結句の「緒方実」が、実は分からない。つまりお手上げである。

ネットで検索しても、該当する項目は見あたらなかった。固有名詞を普通名詞に入替えれば意は通じようが、それでは原作の面白味は出ない。謎の残る一首であった。

今月は十五首選に村野先生の作品が、深野庫之介選で採り上げられている。

・憂ふれば浅き眠りの夢に来て白きかもめの群れひるがえる　　村野　次郎

村野、弄して出来る歌ではない。幽玄至妙まさに香蘭短歌の指標。

一言で評すれば、こんなことになろうか。大人の批評として読んだ。

さてわたしは依然として短歌を中断したままである。短歌の持つ抒情詠嘆の湿りをどう振り払うか。詩友山本哲也とは「華麗に騒がしく」行こうと、時代の空気に精一杯帆を広げて、新たな地平への飛翔を試みていた。

過日、さる歌人に60年代に詩誌に発表したわたしの詩のコピーを見せられ、火傷を負ったような詩句に絶句したのだった。